第24回　オオマリコケムシ

それは、河北潟に浮かぶ不気味な物体です。それは、バスケットボールほどの大きさにもなります。それは、おおむね球状をしていることが多いのですが、不定形で生物か無生物かわからない様相をしています。

私たちが15年ほど前にイベントの際に展示したときには、随分と話題になりました。河北潟の水質悪化が話題になっていたこともあり、公害怪獣のごとく突然変異した生物ではないかといわれました。

それは、北アメリカ東部原産の外来生物です。昔の河北潟には存在していませんでした。文献によると、1974年に柴山潟、1977年には木場潟で大量の発生が確認されています（織田，1978）。同じ頃、河北潟にも侵入したものと思われます。私たちが、河北潟の調査を始めた1994年には、既に河北潟の広域で確認できました。和名をオオマリコケムシと名付けられました。

生物に詳しい人が見ると、直感的に群体であることがわかり、淡水コケムシの一種だろうと察しが付きますが、それにしても巨大で独特な形状をしています。実際にはたいへん小さな生物が集まってできたものです。実体顕微鏡で覗いてみると、ゼリー状の塊の表面に模様のようなものが見えます。微少な個体が集まってできた模様です。群体のほとんどを占めるゼリー状の塊はその個体の分泌物です。それぞれの個体を個虫と呼びますが、個虫は触手をもっており、触手を伸ばして水の中のバクテリアや浮遊している有機物を濾し取って食べます。従って「コケ」ではなく「ムシ」です。

コケムシの仲間は、海洋ではメジャーな生物で多種多様です。一方、淡水産のコケムシは少なく、世界に70種程度といわれています。ほとんどのコケムシの仲間は付着性で水底の岩石やときに漁網などを基盤として生活しています。浮遊性のオオマリコケムシはめずらしい生活スタイルといえますが、発生のはじめの頃は付着生活をしており、群体が成長すると基盤から離れて漂って生活するようです。

河北潟では盛夏～秋に目立ちますが、この頃の巨大な塊を見ると、個虫が死んでいることもあり、代わりに休芽と呼ばれるコイン状の種子に棘の生えたような形状をしたものが見られることがあります。この休芽が越冬して、翌年にまた群体をつくります。顕微鏡で微細な構造を見れば見るほど、不思議な生きものに思えてきます。

河北潟干拓地では、ポンプ場の取水ますにたくさん溜まってしまい、日に何度も取らなければならないこともあるということです。（文　高橋久）